



TITLE:

<II>教育・授業改善、FD

AUTHOR(S):

松下, 佳代; 山田, 剛史; 鈴木, 健雄; 田口, 真奈; 岡本, 雅子

CITATION:

松下, 佳代 ...[et al]. <II>教育・授業改善、FD. CPEHE Annual Report 2020, 2019: 2-15

ISSUE DATE:

2020-03-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/251021>

RIGHT:

II. 教育・授業改善、FD

1. 全学教育シンポジウム

本シンポジウムは、1996年から年1回開催されており、京都大学の教職員が全学的な教育のあり方や、教育の改善・充実の方向性について議論し、部局の枠を越えて教職員の交流を図る場にもなっています。近年は教育担当理事が主催し、2016年度からFD研究検討委員会(2019年度より教育制度委員会 FD専門委員会に改組)の企画により、本センターが実施・運営を行っています。

昨今、世界や我が国において、高等教育を取り巻く状況や社会が大学に求める役割が大きく変わりつつあり、それらの動きは21世紀に入って、より激しさを増しています。このような中で、2018年に、中央教育審議会は、「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)」を発表しました。本答申では、「2040年の展望と高等教育が目指すべき姿—学修者本位の教育への転換—」、「教育研究体制—多様性と柔軟性の確保—」、「教育の質の保証と情報公表—「学び」の質保証の再構築—」、「18歳人口の減少を踏まえた高等教育機関の規模や地域配置—あらゆる世代が学ぶ「知の基盤」—」、「各高等教育機関の役割等—多様な機関による多様な教育の提供—」、「高等教育を支える投資—コストの可視化とあらゆるセクターからの支援の拡充—」などが主要なテーマとして掲げられており、今後の我が国の高等教育政策や大学をはじめとする各高等教育機関における改革の取り組みの方向性や目的が謳われています。

そこで、今年度の本シンポジウムでは、「2040年に向けた京都大学の教育のグランドデザイン」と題し、本答申における提言を「是々非々」の立場から捉えることにしました。それを通じて、京都大学の教育の将来像や今後本学で自主的・自発的に進めるべき教育改革・改善の方向性や目的等について議論することをめざしました。

2019年9月20日に桂キャンパス・船井哲良記念講堂で開催され、参加者は232名でした。



(1) プログラム

午前の部では、京都大学を取り巻く教育改革の現状や方向性に関する北野正雄教育担当理事・副学長の基調講演「京都大学の教育改革の今とこれから」に続けて、グランドデザイン答申でも課題の一つとされている国際化というテーマを取り上げ、本学の国際化の取り組み(国際戦略本部、ASEAN拠点、Kyoto iUP)について、それぞれのリーダーをお招きし、現状と今後の課題についてご報告いただきました。

午後の部は、日本学術会議会長でもある山極壽一総長による基調講演「学術の展望と京都大学の未来」から始まりました。続いて「2040年の社会と高等教育・大学を展望する」というテーマの下で、広井良典こころの未来研究センター副センター長より「AIを活用した政策提言と高等教育の未来」と題する講演がありました。さらに、このテーマについて、フロアの参加者にグループディスカッションを行っていただき、双方向プレゼンアプリを使って全体で共有しました。最後に、2040年をみすえた京都大学の教育の将来展望について、4名の方にご登壇いただき、パネルディスカッションを行いました。フロアの意見に対するレスポンスもまじえながら、活発な意見交換がなされました。

Q1. 2040年の京都大学の教育はどのように変わっていると思いますか?

現在の博士課程の留学生比率を勘案すると2040年には教員のかかりの割合が外国人になる。	京大が存在するのですか?	インタラクティブな授業が増える
学部が無くなる、あるいは大幅に再編される。	日本人学生が減少、外国人学生が増加、自動翻訳が実用化し、マルチリンガル授業が実現する。	停年という概念がなくなる
インターネットを介した教育になり、大学に来るの必要がなくなる。	学部定員を3千人から2千人に減らす	板書の授業が減る。

テーマ2(フロアとのやりとり)

(2) 参加者の声

参加者の感想・意見をうかがうために、アンケート調査を実施しました(有効回答数69件、回収率29.7%)。まず、「今回のシンポジウムが教育改善に役立ったか」では、「役に立った」(57名)が「役に立たなかった」(7名)を大きく上回り、全体として高評価を得ることができました。

興味深かったプログラムでは、基調講演1の「京都大学の教育改革の今とこれから」(26名)が最も多く挙げられ、テーマ2「2040年の社会と高等教育・大学を展望する」(25名)、基調講演2「学術の展望と京都大学の未来」(23名)がほぼ同数で続きました。また興味深かった点に関する自由記述では、「昨年もそう感じましたが、とてもよく大きな枠組みの話をまとめられていて大変参考になりました」(基調講演1)、「留学生が日本人学生と交流する上で『留学生』以外の属性を付与してあげる仕組みが重要だと思った」(テーマ1)、「二元論におさまらない対話とフィールドワークの重要性」「『グローバル人材とは』の最後の『他者を感動させる能力を持つ』に感動」(基調講演2)、「大変興味深い内容で、資料を探して読んでみようと思います。京大の将来についても同様にAIでの解析をお願いしたいです」「後半のディスカッション。意見が結構共通していて、京大で働いていることを実感した」(テーマ2)、「税金で運営されている国立大学に自由はどこまで保障されるのか、という根本的な疑問に対する答えが欲しい」「非常に面白かったので、次回はパネルディスカッションにもっと時間を割いてほしい。そうすればテーマ2で出た意見をもっと反映できるのでは。また、パネルディスカッションには若手、中堅教員も入れるといいのでは」(テーマ3)といった声が聞かれ、プログラムは概ね好ましく評価されていました。

また、小規模な勉強会・ワークショップを企画した場合、参加したいと思うテーマでは、「世界の研究大学の教育改革」(23名)、「学生の学びと成長」(12名)、「入試改革(新テスト、特色入試など)」(11名)などが多く挙げられており、京大と同様の研究大学における教育改革への関心が際だっていました。

現在の課題や今後に向けてのアイデアについての自由記述では、次のような多様な声がありました。「京大という最高の研究型大学が、『最高の研究こそ最高の教育』という信念にならないのはなぜだろうか？研究力を疲弊させながら教育改革をするのではなく、研究力が教育を牽引するという構図を作るほうが京大に合っていると考えている」、「留学生の受入れや特色入試に際して入口に関してはより柔軟で良いと思う。学生にもより多様性が生まれて良い。一方で出口に関してはしっかりした管理をするべき。卒業生のクオリティをしっかりと担保することで大学としてのブランド力醸成もできるだろう」、「国際化のためには、教員にとっても職員にとっても、たいへん手がかかる現実があります。専門性を備えた職員の配置というのは、小さな部局にとって夢の夢で教員も職員も定削に苦しみ、プロジェクト経費をかき集めて、短期の非常勤さん頼りで目の前の課題を乗りきっている毎日です」、「多くの教職員の方々が、はんざつな事務、会議、評価作業につかれている」、「修士課程、博士後期課程学生の充足率と質の低下。学際研究を掲げているが、学生の関心は自分たちの周辺に留まり、他研究科の話を聞いたり、共同研究に参加することが少ない」などです。

研究力を維持しながらいかに教育の質向上を進めるか、部局を越えた取り組みをどう活性化していくか、事務・会議・評価作業の効率化をどう図るかは、テーマ2のディスカッションでも多く出された課題でした。

このように、本シンポジウムは、京都大学の教育改革の方向性について、また京都大学の存在感をどのように高めてそれをどう発信していくかなどについて、ともに議論する機会を提供できたのではないかと考えられます。

当日の詳細な報告書は下記からご覧になれます。

●全学教育シンポジウム：<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/activity/symposium.php>

(松下 佳代)





全学教育シンポジウム プログラム

司会進行: 田口 真奈 高等教育研究開発推進センター准教授

【午前の部】

10:00～	開会挨拶・基調講演 1: 「京都大学の教育改革の今とこれから」 北野 正雄 教育担当理事・副学長
10:35～	テーマ1: 「京大の教育の国際化を巡る現状と今後の課題」(報告・パネルディスカッション) 《モデレーター》 松下 佳代 高等教育研究開発推進センター教授 《報告者・パネリスト》 「近年の実績とこれからの20年に向けての課題」 河野 泰之 国際戦略担当副学長・国際戦略本部長 「ASEAN地域を中心とした国際教育の進展」 縄田 栄治 ASEAN 拠点長・農学研究科教授 「Kyoto iUP: Kyoto University International Undergraduate Program」 長谷部 伸治 国際高等教育院 吉田カレッジオフィス副室長・特定教授
12:05～	(昼食・休憩)

【午後の部】

13:00～	基調講演 2: 「学術の展望と京都大学の未来」 山極 壽一 総長
13:35～	テーマ2: 「2040年の社会と高等教育・大学を展望する」(報告・ディスカッション) 《モデレーター》 山田 剛史 高等教育研究開発推進センター准教授 《報告者》 「AI を活用した政策提言と高等教育の未来」 広井 良典 こころの未来研究センター 副センター長・教授
15:10～	(休憩)
15:25～	テーマ3: 「京都大学の教育の将来展望2040」(パネルディスカッション) 《モデレーター》 飯吉 透 教育担当理事補・高等教育研究開発推進センター長・教授 《パネリスト》 山極 壽一 総長 北野 正雄 教育担当理事・副学長 宮川 恒 国際高等教育院長 広井 良典 こころの未来研究センター 副センター長・教授
16:55～	閉会挨拶
17:00～	終了
17:15～	情報交換会 カフェ「Arte」



2. 新任教員教育セミナー

2019年9月13日、京都大学百周年時計台記念館にて、「京都大学新任教員教育セミナー2019」を開催しました。本セミナーは、今年度が第10回目となり、本学に採用された新任教員および助教から昇任された教員を対象に実施しています。

京都大学らしい教育の在り方について考えたり、学内に存在する様々な教育支援について知っていただいたり、実際に直面している教育に関する問題や学生指導上に関わる課題などについて共有したりする場所になるようプログラムを作っています。

(1) プログラム

プログラムは表1の通りです。全学、部局、個々の教員という異なるレベルでの教育的取組を、ミニ講義や討論などを通じて理解してもらうことを意図して設計されています。

表1 2019年度京都大学新任教員教育セミナープログラム	
13:00～	開会式（司会：山田 剛史 高等教育研究開発推進センター准教授） 趣旨説明 松下 佳代 高等教育研究開発推進センター教授
13:05～	セッション1 オープニングレクチャー 「現在の大学教育の動向と京都大学の教育改革」 北野 正雄 理事・副学長（教育・情報・評価担当）
13:30～	セッション2 本学教員による授業実践紹介「私の授業」 授業実践① 高橋 淑子 理学研究科教授 授業実践② 小森 雅晴 工学研究科教授
14:30～	休憩
14:50～	セッション3 グループ別セッション（参加型セッション）（詳細は表2参照）
16:30～	休憩
16:50～	セッション4 インテグレーションセッション
17:30～	閉会式 閉会挨拶 飯吉 透 高等教育研究開発推進センター長・教授

全体会では、まずセッション1として、北野正雄教育担当理事・副学長より「現在の大学教育の動向と京都大学の教育改革」と題したオープニングレクチャーがありました。大学を取り巻くマクロな状況を踏まえつつ、本学が取り組んでいる様々な教育改革について紹介がありました。特に、昨今話題になっている高大接続に関する取組について、新たに始まった特色入試も交えながら紹介されました。セッション2は、自身の授業実践を紹介する「私の授業」でした。今回は、高橋淑子理学研究科教授と小森雅晴工学研究科教授より授業実践の紹介がありました。セッション3は、参加型セッションとして、用意した5つのテーマごとに部屋に分かれてのワークショップがありました（表2）。最後のセッション4は、再度全体で集まってジグソー形式によるインテグレーションセッションを行いました。

表2 セッション3 参加型セッションの各テーマと内容

テーマ	担当講師	主な内容	ファシリテーター (センター担当者)
留学生とどう向き合うか	理学研究科附属サイエンス連携探索センター(SACRA) 国際戦略部門講師 鈴木 あるの	研究室や授業のクラス内に留学生を見かけることが普通になりました。異なる語学能力や文化・宗教・政治的背景をもつ国々の学生が共に気持ちよく学び、多様性を建設的な議論へと結びつけるために、教員にできることは何でしょうか。このセッションでは、マナーとして最低限知っておきたい海外事情や異文化の考え方、特に本学で起こりがちな問題を紹介すると共に、皆様のご経験も共有していただき、より多くの疑問を解決していければと思っています。	SADEHVANDI 研究員 河野研究員
研究室運営を考える	学際融合教育研究推進センター 准教授 宮野 公樹	教員にとっての研究推進の場、そして人材育成の場である研究室。研究室を研究と教育の原動力として機能させるにはどうしたらいいでしょうか。PI(Principal Investigator)各々のやり方があるとは言え、この機会に一度考えておくのも大事かと思えます。いくつかの事例と調査結果を紹介いたします。	岡本特定講師
困難を抱えた学生に向き合うには	学生総合支援センター カウンセリングルーム講師 和田 竜太	修学上、研究指導上の不適応を起こした学生・院生に対し、教員はどう向き合えばよいのでしょうか。学生のその後の人生を大きく左右する時期に関わっていることを意識し、可能な対応を探るにはどうすればよいのでしょうか。今回は様々な不適応の様相の紹介と「困難」を知る、あるいは気づくための話の聞き方を体験・実習したいと思います。	勝間特定助教
アクティブラーニング型授業をやってみよう	薬学研究科講師 津田 真弘 高等教育研究開発推進センター 教授 松下 佳代	昨年度から薬学部では、アクティブラーニングを取り入れた授業(講義を聴くだけでなく、話す、書く、発表するなど学生側の能動的な参加を含む授業)に取り組んでいます。その中で、学生たちは能動的に参加するだけでなく、協働で深く学ぶ姿勢を身につけています。このセミナーでは、その授業で使っているさまざまなやり方、技法を実際に体験してもらいながら紹介します。アクティブラーニングについてまったく初めての方から、この機会にしっかり学びたいという方で参加できます。	鈴木特定研究員
ICTを使って、普通の授業をもっと楽しく、ちょっと楽に	高等教育研究開発推進センター 准教授 田口 真奈/酒井 博之 情報環境機構教授 梶田 将司	インターネット上の教育リソースや既存のICTツールをうまく使うことで、授業準備が楽になったり、教育効果をあげたりすることができます。ここでは、学内のICT活用実践事例や、簡単に使える様々なリソースを紹介します。ICTを使うのはちょっとめんどくさい、と思っておられる先生にとっては、最初のハードルが下がるような、もっと使ってみたい、と思っておられる先生にはその可能性を感じていただけるようなセミナーにしたいと思います。	安宅特定研究員





(2) 参加者

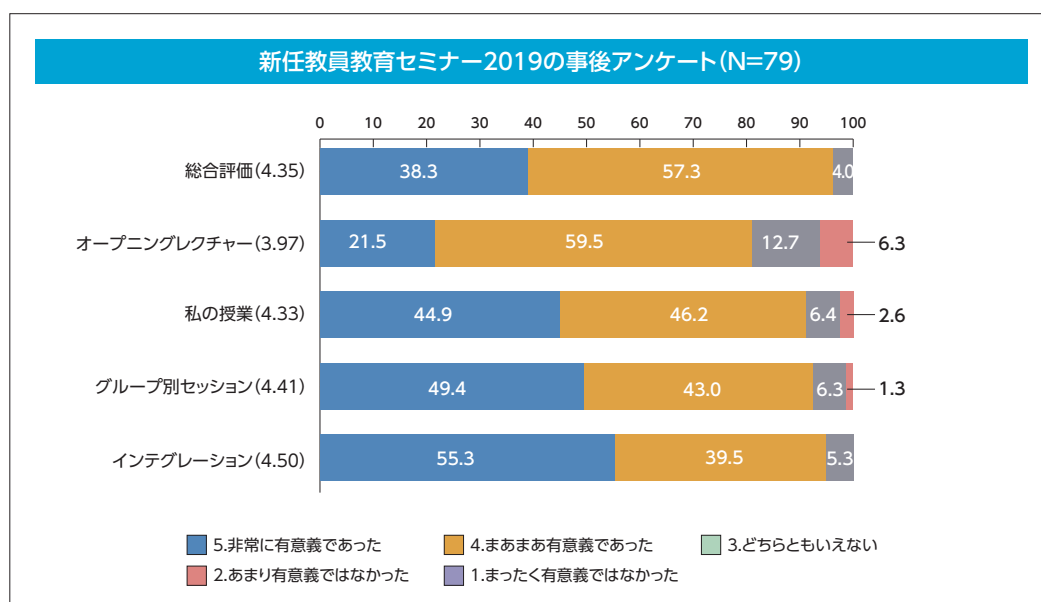
本セミナーは、教育目的に限定して設定されているため、受講対象となる新任教員を、「平成30年度の本セミナー実施以降、本学に採用されて、正規科目を担当している者」と定義した上で、教育推進・学生支援部教務企画課経由で、各部局に対して参加者依頼通知を行いました。当日の参加者は87名(教授15名、准教授17名、講師15名、助教40名)でした。

(3) 参加者からの評価

セミナー参加者に対して、セミナーに対する意見・感想を問う事後アンケートを行いました。その結果、79名(回収率90.8%)より回答が得られました。

①プログラムの有意義度

プログラム全体の有意義度について、総合評価は「4.35」(「非常に有意義」から「まったく有意義でない」の5段階)と高い評価が得られました。また、個々のセッションについて見てみると、上位項目としては、インテグレーションセッション(4.50)、グループ別セッション(4.41)、私の授業(4.33)となっていました(図)。



②プログラム全体／グループ別セッションで追加すると良いと思われるもの

- MOOCのTraning Programを希望します。
- 高大接続活動の効果について
- 研究・教育と就職(活動)のバランスについて。
- ずっと研究ばかりで話すことに自信がありません。学生さんの心を掴む話し方、話の聞き方もトレーニングできる機会があったらいいなと感じました。今回、専門の違う教員の方々と色々お話できて良かったです。
- 教員の受講生同士がもっと悩みを共有できるsessionがあってもよいと思います。
- 大社接続について、もしくは社→大接続(専門職領域のため)
- 今回のプログラムに十分満足しました。他のテーマの話も興味があるので第一回・二回と新入教員セミナーが複数あるとうれしいです。
- 合理的配慮について。学習者の動機づけについて。教育における失敗について。
- 教員の時間割振り(エフォート値ではなく、土日や余暇も含む時間)の実例などの紹介をいただければ参考になります。

③今後に向けての課題

- セッション2も興味深かったが、個人的には文系の教員からの報告も聞きたかった。
- 外国人教員への配慮が必要だと感じた。
- 女性の研究者(ロールモデル)の集まりがあればと思いました。
- 資料をPDFなどで配布・周知するととても良い。
- インテグレーションセッションの時間がもう少し長くてもよいのではないかと思います。
- セッション3の各項目について、困難に直面した時に、相談する窓口が常にかかっているとありがたい。
- 桂から参加するなら、1日プログラムでもっと充実させても良いのではないかと思います。
- もっと参加者同志が話し合える機会を増やしてもよいのではないのでしょうか。
- session3の内容がもう少し事前に分かると選択に好都合かも。
- 職階がバラバラなのはある意味有意義であったが、同じ職階での共通の課題や悩みについても触れられる機会があればもっとよかったと思う。
- 難しいとは思いますが、より具体的なアドバイス(実例など)を増やしていただければ幸いです。

④参加して良かった点

- 定期的にこのような機会があり、希望者が受けられるとよいと思いました。
- 大学が用意しているICTに関する仕組みや授業サポートプログラムについて様々な情報が得られた点が良かった。
- グループディスカッションなど、現在教員として疑問に思っていること、悩んでいることなどを共有し、解決できたこともあり良かったと思う。
- 分野が異なるが、共通した問題意識を共有できて有意義であった。
- とても勉強になりました。最後のセッションでディスカッションができたのもよかった。全員学内の先生なので、ぶっちゃけた話ができた。
- 様々な事例でよい授業のやり方を学ぶことができました。
- グループセッションでは具体的事例を多く挙げて頂いて問題を身近に感じることができました。正解はないのだけど、自分の中で考えておく時間ができて有意義だったと思います。
- 非常に京大らしいおもしろい内容の組み合わせでした。後輩にも勧めます。
- 他の教員の方とフランクに話すことができ良かったです。新任教員だけでなく、例えば10年教員セミナーなどもあってもよいかと感じました。
- グループ別セッションの先生方の説明が理解しやすくなりました。京大の現状が知れて参加した意味があった。
- 新任ではない先生向けにも実施できれば全学的に効果が出やすいかと思います。
- 内での教育に従事する中で生じる諸問題について、あらかじめ心がまえができたこと、そのときに相談できる方々を知ることができた点が良かった。
- 教育について、全くの素人で不安を持っていたが、セッション2・3で他の先生方の意見を拝聴することができて参考になりました。
- セッション2は、講義経験の無い私の背中を押してくれるような内容で良かったです。
- セッション3では、ロールプレイなどもあり、実際に自分自身で体験する中で、難しさが分かったり、他の先生の様子を観衆することで改善点などを考えられ、良かったです。

いただいた意見も参考にしながら、今後もよりよいプログラムになるよう改善していきたいと思います。

(山田 剛史)

3. プレFD

「プレFD」とは、これから大学教員になろうとする大学院生やオーバードクター(OD)・ポスドク(PD)のための職能開発活動の総称です。ここでは、本センターが支援する、4つのプレFDの取組についてご紹介いたします。

(1) 大学院生のための教育実践講座

本講座は、将来、大学教育に携わることが希望する京都大学の大学院生(OD・PD・研修員などを含む)のために、ファカルティ(大学教員)へと自己形成していくきっかけとなる場を提供するプログラムです。2019年度は、8月23日に、百周年時計台記念館2階で開催されました。15回目となる今回は、本センター主催で行いました。

当日は、さまざまな専門分野から39名が受講し、大学教育の現状をおさえるための基本的な講義、それをもとに4つのテーマに分かれて大学教育実践について検討するためのジグソー法を取り入れたグループワーク、劇団の方をお招きしてコミュニケーションデザインを学ぶボディワークなど、多様なプログラムをもとに、受講生それぞれが「大学でどう教えるか」という問いに対して考えを深めながら、大学院生同士のネットワークを広げました。全てのプログラムに参加した受講生には総長名の修了証が授与されました。

研修会直後にアンケートを実施し、プログラム全体に対する

満足度を5件法(1: まったく満足していない～ 5: 非常に満足している)で評価してもらったところ、満足度の平均は4.6でした。また、昨年度に引き続き今年度もポスター形式での議論のまとめと報告を実施しました。やや時間不足の感はありましたが、その評価も4.6となり同じく好評でした。参加前後における大学教育に対する問題意識の変化を聞く質問(自由記述)では、「研究能力を高めることにばかり、目がいていましたが、教育という点でも高めなければならないと思いました」、「授業を組み立てる上でどのようなことを考えればよいかが明確になった」、「(授業全体としての)ゴール設定の重要性を痛感した」といった回答があり、受講者それぞれの視点から、未来のファカルティの一員として、大学教育に対する考えを深める良い機会となったようです。

● 大学院生のための教育実践講座

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/study/index.html>

(松下 佳代・鈴木 健雄)

プログラム	
10:00~	開会式 挨拶: 飯吉 透(高等教育研究開発推進センター長・教授) 趣旨とプログラムの説明: 鈴木 健雄(高等教育研究開発推進センター特定研究員)
10:20~	セッション1 ミニ講義1「大学を取り巻く状況と多様な授業実践」: 松下 佳代(高等教育研究開発推進センター教授)
10:45~	セッション2 グループ討論1: 「アクティブラーニング」「ICT活用」「多様性」 「授業デザイン」の4つの部会に分かれて議論
11:45~	セッション3 ランチと自由討論
13:00~	セッション4 コミュニケーションデザイン「演劇でコミュニケーションデザイン」: 蓮 行(劇団衛星主宰)
14:20~	セッション5 ミニ講義2「大学における教育と研究—学習支援の現場から—」: 福田宗太郎(大阪体育大学学習支援室主任)
15:05~	セッション6 グループ討論2: 「アクティブラーニング」「ICT活用」「多様性」 「授業デザイン」の4つの部会に分かれて、さらに深く議論
16:05~	グループ討論整理
16:40~	セッション7 発表と全体討論: ポスター形式で4部会から11グループのポスターを掲示し、 活発な議論を展開
17:40~	ラップアップ閉会式
17:55~	挨拶・修了証授与: 飯吉 透(高等教育研究開発推進センター長・教授) 閉会式終了後 情報交換会(～19:30)



(2) 大学院横断教育科目群「大学で教えるということ」

京都大学では、所属研究科の高度な専門教育に加えて、研究科を横断する教育プログラム(研究科横断型教育プログラム)を2009年度から実施してきました。2018年度からは当該プログラムを改編して、研究科が開講する科目の中で、他研究科学生の履修にも配慮され、多くの専門分野の共通基盤となりうる科目、多数の研究科の大学院生が受講するに相応しい横断的な教育内容の科目をまとめ、「大学院横断教育科目群」として履修できるように整備されました。

その中の「キャリア形成系」(従来は「マネジメント・キャリア・研究者倫理科目群」)の科目として、将来教育職に就くことを希望する大学院生向けの科目「大学で教えるということ」(後期集中講義)を提供しています。「大学院生のための教育実践講座」は、講義とディスカッションが主体の入門的な内容になりますが、本授業は実際の授業をデザインし、模擬授業やピアレビューを行うなど、実際に授業を实践するうえでの基礎となるスキルの育成を含めた応用的な位置づけになっています。本授業の到達目標は以下の通りです。

- (1) 大学教育の現状を知り、理解すること
- (2) 授業デザインに関する基本的な知識を知り、理解すること
- (3) 効果的な授業デザイン(到達目標・評価方法)を作成すること
- (4) 多様な授業方法を知り、活用方法を計画すること
- (5) 模擬授業・検討会を通じて、授業実践の技能を磨くこと
- (6) グループでの協同作業に積極的に関わること
- (7) 自身が大学で教えることに関する広い視野と具体的なイメージを持つこと

2019年度は2月5日・6日・7日の3日間で実施されました。受講生は12名で、修士課程から博士後期課程まで幅広い大学院生が受講しました(教育学研究科4名、経済学研究科2名、医学研究科2名、人間環境研究科1名、情報学研究科1名、地球環境学1名、経営管理大学院1名)。専門分野の異なるチーム(3チーム)で授業をデザインし、模擬授業を行いました。終了後のアンケート(12名中12名から回答、回答率100%)では、「学生自身に考えさせる工夫がされていた(平均3.8)」、「内容に関する興味を高めるための配慮があった(3.8)」、「講義中に学生の質問・発言等を促してくれた(3.8)」、「総合的に、自分にとって意味のある講義だった(3.8)」(いずれも4段階評価)など高い評価が得られた。自由記述からは、「短期集中という中で非常に濃密な学習機会であり、インプットもアウトプットも多かったため、いい意味で疲れる授業であった」、「『教える』ということが、ときに価値観の押し付けにならないかということや、多様な背景を持つ学生たちへの配慮が十分になされているかということを考える機会になった」、「人に教えるということは決して一方的に内容を伝えるのではなく、相手に能動的に参加してもらうための工夫が重要だと思いました」、「模擬授業をここまでシステマティックに作成できる機会はなかなかないので、大変貴重な経験となった」、「講義を通じて何かを効果的に伝える技術を身につけることが、学会発表等の自身の研究の場においても、より広く、何かを伝えるという事柄一般について、大きく汎用性のある有用な技術だと感じ、本当に有意義な学びを得ることができました」といった様々な声が聞かれました。



(山田 剛史)

(3)文学研究科プレFDプロジェクト

文学研究科プレFDプロジェクトは、文学研究科のOD・PDを対象とするもので、2009年度から実施されています。年度はじめの事前研修会、OD・PDが講師となり実施する学部生向けの授業、他の講師およびコーディネーターを交えた授業ごとの検討会、そして年度末の事後研修会により構成されます。所定の条件を満たした参加者には、京都大学総長よりプロジェクトの修了証が授与され、すでに約160名が修了証を得ています。

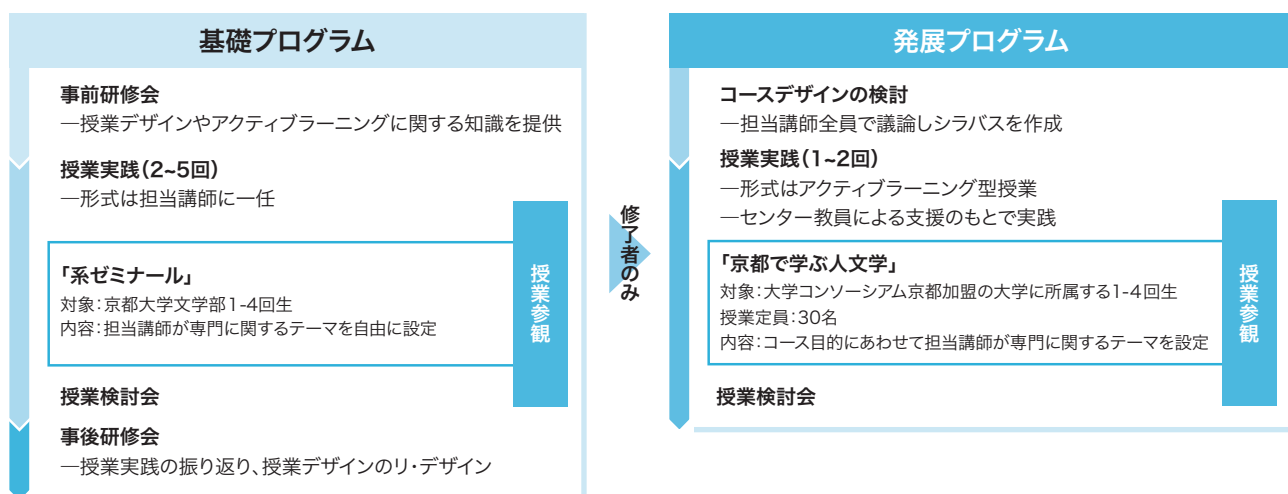
2019年度は、文学研究科よりコーディネーター5名、教務補佐員4名、講師21名が参加し、本センターより4名がこれをバックアップする形で、哲学基礎文化学系と行動・環境文化学系、基礎現代文化学系の3つのリレー講義が展開されました。

本授業は、公開授業となっており、学内教職員の参観は随時可能です。日程などの詳細は、以下のHPをご覧ください。

●文学研究科プレFDプロジェクト

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/>

(鈴木 健雄・田口 真奈)



文学研究科プレFDプロジェクトの流れ

(4)大学コンソーシアム京都・単位互換リレー講義

2015年度より、ブレFDプロジェクト修了後の発展的プログラムとして、大学コンソーシアム京都との連携のもと、京都大学の学生を含め、様々な大学に所属する学生を対象とした授業が提供されています。本プログラムでは、ブレFD修了生が協力し合い、個々の担当授業だけでなく、半期15回の講義全体をデザインするという経験を積むことに主眼がおかれているため、プロジェクトは開講の前年からスタートします。そこで、各自の担当授業と、全体目標とのすりあわせを行いながら、シラバス作成をおこないます。また、開講直前には、それぞれが「授業デザインワークシート」を持ち寄り、全体の到達目標を見据えて、各自の授業目標を確認、そのための具体的な授業デザインを検討し合います。

2019年度の開講テーマは「つながりを問い直す：コミュニティとコミュニケーション」でした。コーディネーター1名のもと、社会学、歴史学、心理学、哲学といったさまざまな専門分野出身の若手講師7名が、アクティブラーニング型の授業を展開しました。一方的な知識伝達だけでなく、受講生間のディスカッションを促す工夫が凝らされた本講義を通じて、受講生は、「コミュニティ」と「コミュニケーション」について広く学ぶことによって、複雑に絡み合った「つながり」の綾を解きほぐすことを試みました。

●文学部単位互換リレー講義「京都で学ぶ人文学」

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/prefd/literature/consortium/>

(鈴木 健雄・田口 真奈)



4. 他部局との連携

(1) 薬学部との連携

① 授業改善の支援

京都大学薬学部では4年制の薬科学科と6年制の薬学科を設置し、最先端研究や高度医療で活躍できる人材の育成を目指してきましたが、近年、薬学を取り巻く社会環境が急激に変化するなかで、博士課程に進学する学生の減少などの問題が生じていました。そこで、入学後、早期から京都大学薬学部が育成したい人材像を学生にメッセージとして伝えるとともに、学生が将来ビジョンを描きながら、高い薬学研究マインドを身につけることを促すために、2018年度よりカリキュラム改革が進められています。具体的には、少人数で行うアクティブラーニングを積極的に導入し、学生の課題発見能力や問題解決能力を低学年から育成しています。このアクティブラーニング科目のうち、入学直後から行われるのが、1年次前期に実施する「薬学研究SGD演習」(SGDはSmall Group Discussionの略)です。この科目では、非言語的コミュニケーション、ロジカルシンキング、医療・生命倫理などが講義とディスカッションを通じて学ばれ、ディベート、研究室訪問などの活動も行われています。2018年度より、本センターはこの授業に参加し、実践的なFDを行っています。



この授業の取り組みについては、2018年度の日本看護学教育学会の講演(松下「ディープ・アクティブラーニングの考え方と方法—医療人教育における3つの事例から—」)で紹介し、それがきっかけで以下の本にも論考が所収されています。

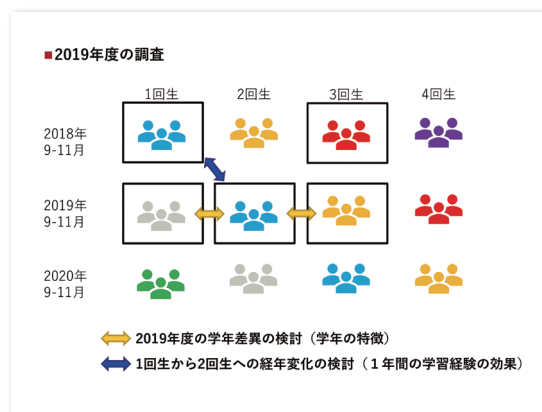
- 津田真弘・米澤淳・山下富義・高須清誠・松下佳代(2019)「医療・生命倫理における『語り』を活用したディープ・アクティブラーニング—薬学教育における『薬学研究SGD演習』—」ディベックス・ジャパン編『患者の語りと医療者教育—“映像と言葉”が伝える当事者の経験—』日本看護協会出版会。

② 学生の学習実態調査の支援

このような授業改善の効果検証として、学生の学習や生活の実態に関する調査・分析も進めています。調査は質問紙調査で、薬学部の学生がふだんどのように学習を行っているのか(学習時間、学習コミュニティなど)という側面から、さまざまな能力の獲得感、研究マインド、教員との親密感や所属意識まで、大学生の学習において近年重要視されている幅広い指標を用いています。調査対象は2018年度が1・3回生、2019年度は1・2・3回生で、横断調査と縦断調査(パネル調査)の特徴を備えたものになっています。

本調査の結果は、大学教育研究フォーラムでも報告されています。

- 高須清誠・山下富義・津田真弘・柿澤昌・矢野義明・長沼祥太郎・松下佳代(2019)「博士人材の育成を目指す京都大学薬学部における初年次アクティブラーニング科目『SGD演習』の試み」第25回大学教育研究フォーラム。
- 長沼祥太郎・松下佳代・高須清誠・山下富義・津田真弘(2019)「京都大学薬学部における初年次アクティブラーニング科目『SGD演習』の効果検証の枠組みの設計」同上。
- 杉山芳生・松下佳代・高須清誠・山下富義・津田真弘(2020)「京都大学薬学部における初年次アクティブラーニング科目『薬学研究SGD演習』の2年目の効果検証」第26回大学教育研究フォーラム。



(松下 佳代)

(2) 医学教育・国際化推進センターとの連携

医学教育・国際化推進センターでは、2016年度から、文部科学省課題解決型高度医療人材養成プログラムとして「現場で働く指導医のための医学教育学プログラム(FCME)―基礎編―」(<http://cme.med.kyoto-u.ac.jp/fcme/>)を提供しています。このプログラムは、学生や研修医に対して指導経験のある医師を対象にしたもので、医学教育学全般の知識を習得することで、自身や自施設の教育活動を省察し、改善できるようになることを目標としています。毎年、全国から12名の医師が参加し、年3回の参加体験型学習(3泊4日)、および月2回のWeb討論型学習(1回2時間)を通して1年間学びます。「医療・教育を『社会的共通基本』として捉え、暴走する新自由主義と正当に対峙する」など明確でユニークな思想・哲学を持ち、医学教育学の理論にもとづく最新の内容・方法を具体化したプログラムです。

2019年度から文科省の指定が外れましたが、自立したプログラムとして継続されています。本センターからは、「カリキュラム開発:カリキュラムを創る・壊す―自由な学びの場の構築」に松下が講師として参加しています。また、LMSとしてPandaも大いに活用されています。

現在、これまでの実績をもとに、『現場で働く指導医のための医学教育学―基礎編(仮題)』が編まれており、近く京都大学学術出版より刊行予定です。社会人の学び直しが、大学・大学院教育の大きな課題になっている現在、国内外で勤務する医師を対象に、Web授業と経験学習を組み合わせた密度の濃いプログラムを実現した例として、とても参考になる取り組みです。

なお、医学教育・国際化推進センターとは、教育アセスメントについても連携していますが、そちらについては、「IV. 教育アセスメント」をご参照ください。

(松下 佳代)



2019年度版ハンドブック
(<http://cme.med.kyoto-u.ac.jp/fcme/handbook.pdf>)

(3) 宇宙総合学研究ユニットとの連携

京都大学学際融合教育研究推進センター宇宙総合学研究ユニットでは、宇宙飛行士の土井隆雄特定教授を中心として、「有人宇宙活動のための総合科学教育プログラムの開発と実践」(文部科学省宇宙航空科学技術推進委託費、2016～2018年度)が進められ、さらにそれを発展させた「有人宇宙活動のための研究教育プログラムの開発と実践」(文部科学省宇宙航空科学技術推進委託費、2019～2021年度)の取り組みが進められています。このプログラムの目的は、宇宙に関わる高い専門性を持つ次世代人材の育成と潜在的な宇宙利用の拡大の両面に貢献することであり、全学共通科目「宇宙総合学」、ILASセミナー「有人宇宙学実習」、研究科横断型教育プログラム「有人宇宙学」などが開講されています。

本センターは、この教育プログラムのカリキュラムや評価のデザインに協力しています。授業評価として学生に対するフォーカスグループ・インタビューの実施や、学習活動・学習評価としてコンセプトマップの作成(事前・事後)などを提案・支援しています。本調査の結果は、宇宙ユニットシンポジウムや大学教育研究フォーラムでも報告されています。

- 田口真奈・香西佳美・松下佳代・水村好貴・寺田昌弘・土井隆雄・柴田一成(2019)「大人数リレー講義における評価・学習ツールとしてのコンセプトマップの活用―京都大学全学共通科目『宇宙総合学』を事例として―」第25回大学教育研究フォーラム。
- 香西佳美・田口真奈・水村好貴・寺田昌弘・松下佳代・土井隆雄・柴田一成(2019)「学際的な授業科目における学生の学びの分析―京都大学全学共通科目『宇宙総合学』受講生の理系・文系による違い―」第25回大学教育研究フォーラム。
- 松下佳代・田口真奈(2020)「宇宙総合学で学生は何を学んだか―コンセプトマップから見る―」第12回宇宙ユニットシンポジウム。
- 田口真奈・松下佳代・土井隆雄(2020)「体験教育の評価手法の検討―「パラボリックフライト」の経験が宇宙観に与える影響」の検討を通して―」第26回大学教育研究フォーラム。

特にコンセプトマップを用いた教育効果の評価手法については事業実施主体からも高く評価されています。センターでは、さらにこの評価手法を洗練させるべく研究開発に取り組んでいます。

(田口 真奈・松下 佳代)



パラボリックフライトの様子

5. 高等教育研究開発推進センターウェブサイト

京都大学高等教育研究開発推進センターのウェブサイトが2017年度に完了し、本年度から本格的に始導しました。当サイトのクリエイティブコンセプトを「RE:EDit(リエディ)」とし、編集を軸にした情報発信、メディアのようなサイトを目指しています。

当ウェブサイトの特徴としては、教員の抱える悩みや教育改善の工夫などを集約し、より双方向的なものにしたいと考え、①必要な人に必要な情報を届けるための情報設計、②発信した情報を元に、教員との交流を促しPDCAを回す仕組みを構築することが挙げられます。日本語サイトと同様の英語サイトも公開しており、京都大学の教員だけでなく、国内外の教育関係者にも広く見てもらうことができるようにしております。

2020年1月現在で、ユーザー数は21,611名(2017年は15,925名、2018年度は23,567名)、ページビュー数は51,598(2017年56,531、2018年63,537)で、ともに昨年度より減少傾向にあります。しかしながら、ページビュー数の内訳(表1)を見ると、「カリキュラムデザイン」、「授業のデザイン・方法」、「教育アセスメント」、「スタッフ紹介」など特定のページについては閲覧数が増加していました。なお、2019年度のユーザー数の推移(図1)を見ると9月に実施された「ASAGAOメーリングリスト」のリニューアルを境に9月から10月にかけてユーザー数が増加していました。

表1 2019年度ページビュー数(全ページ)

2019年度		2018年度	
ページ名	ページビュー数	ページ名	ページビュー数
トップページ	8,295	トップページ	11,952
ASAGAOメーリングリスト	5,521	スタッフ紹介	2,233
カリキュラムデザイン	4,992	授業のデザイン・方法	1,784
授業のデザイン・方法	4,291	教育アセスメント	1,604
教育アセスメント	3,507	カリキュラムデザイン	1,582
スタッフ紹介	2,885	組織概要	1,477
高等教育学コース	1,747	出版・刊行物	1,395
京都大学のFD	1,477	教育・学習へのICT活用	1,224
教育・学習へのICT活用	1,198	イベント	1,218
出版・刊行物	1,150	「第24回大学教育研究フォーラム」(2018.3.20-21)開催のお知らせ	1,218



図1 2019年度ユーザー数の推移

今後も京都大学の教員のみなさんが、オリジナルの教育手法について考える上でのきっかけとなるような情報を発信したり、また授業構成を考えるヒントを探す上で有益なベテラン教員のインタビュー記事を掲載したり、現代日本の高等教育について考えるフォーラム等の情報が見えるようなサイトとして、活用していただけるよう、アップデートしていく予定です。ぜひ、当ウェブサイトを訪ねていただき、ご質問やご要望、情報提供などいただけると幸いです。

(岡本 雅子・山田 剛史)